



# 神聖かまってちゃんとスピルバーグ

ゲーニーズ（まぬけな奴ら）の負けられない戦い

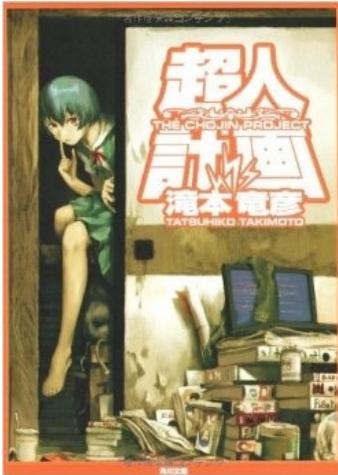
みなさんは『ルサンチマン』という言葉をご存知だろうか。

それは現実の生にたいする不満である。世界が今のようではなく、別のようであってほしいという願望である。弱者が抱く強者への妬みであり、強者にたいする復讐感情である。

↓

ツイッターから響いてくる他人の仲の良い会話に耳をそばだてつつも、「どうせ奴らは孤独に耐えられない弱虫さ。日々の高級な悩みごとに苦悩して、一人で立派な創作活動にいそしむわたしにくらべたら、しょせん奴らは汚い豚だわ！」などと心に唱える。

彼女の惨めで悲しい自己正当化こそが、ルサンチマンの芽なのだ。



「たしかにわたしは20年間弱、いちども成功したことも人から褒められたこともないけど、現実なんてしょせんゴミだわ！ わたしの脳内にある成功風景にまったくかすりもしない現実の世界なんて路肩の石ほどの価値もないね！」

そんな哀れな自己ぎまんこそがルサンチマンの発露なのだ。

↓

そしてこの鬱屈した感情は、しまいには世の価値基準の転覆を試みる。人生の敗者と勝者を、むりやり逆転しようとする。そして彼女は、はかば本気でこんな文章を書く。

「ツイッターなんかしてる奴は全員ダメだ。文化系だろうがアニメオタクだろうがネットでチャラチャラしてる奴は全員クズだ。わたしみたいに孤独な思索生活を長年続けてきた者こそが一番格好いいんだ！ だから誰か早くわたしにメールをよこせよ。リプライよこせよ。ほら、そこのキミ、はやくわたしに求愛メール書いてよこせよ。みんなに見られるリプが恥ずかしいならダイレクトメッセージでいいんだよ？ はやくわたしに求愛メールくれよ。」

……だが彼女の矮小なルサンチマンには、世界の価値基準を転倒させるだけの力などない。

↓

孤独とロックンロールこそがわたしの友だった。でも、わたしはそれにも最近結構ウンザリしている。

世間のロックンロールはわたしの思うものとぜんぜんちがうからだ。



踊れるロックなんかいない。4つ打ちじゃない。わたしはべつに踊りたくてロックを聞きたいわけではない。踊るのが正義となっているいまのロックシーンに居心地の悪さを感じている。

そういう世間の価値を転覆させてやろう。それがルサンチマンである。

『グーニーズ』という映画がある。↓

『グーニーズ』という映画がある。

1985年製作のアメリカ映画（The Goonies）だ。



あらすじはざっとこう。同級生たちからグーニーズ（まぬけな奴ら）と呼ばれ疎外された小学生グループらが、伝説の海賊が隠した財宝の地図をみつけて地下世界を冒険する（自転車で冒険にでるところが熱い）。

監督は後にリーサルウェポンで大ヒットを飛ばすリチャード・ドナー。脚本は後にホームアローンで大ヒットを飛ばし、00年代には文学界では天文学的数字のヒットを飛ばした作品ハリーポッターの映画初期3作を担当したクリス・コロンバス。製作総指揮はスティーブン・スピルバーグ。この布陣はすごい。



↓

さて、主人公のマイキーはぜんそく持ちだった。劇中ではなんども吸引器を使うシーンが印象的である。

マイキーは勇気で数々の困難をのり超えていく。その姿はカッコよかった。そうなる、不思議なことに吸引器をつかう姿も格好よく見える。これが価値の転覆だ。



製作総指揮のステイブン・スピルバーグは幼い頃↓

製作総指揮のステイブン・スピルバーグは幼い頃、いじめられていたという。吸引器をつかっている子どもはいじめられるものだ。いまふうにいえばイジリといってもいいが。

『グーニーズ』では、そんなマイキーが活躍し、それを観た子どもたちがマイキーをカッコいいと考える。吸引器をつかう姿もカッコよくなるのだ。それを演出として良しとしたスピルバーグは全世界の立場の弱いこどもをヒーローに見えるようにした。つまり、彼はルサンチマンばりばりの男だったのだ。

↓

スピルバーグさん格好いいです。ルサンチマンは惨めといえるが、じつはそういう使い方もあるのだ。



と、は、い、え、わたしたちのルサンチマンは格好良さはない。なぜならば、なにも遂行していないからだ。スピルバーグが格好いいのは実行して、成功しているからだ。

悶々としてるルサンチマンに心とらわれているわたしたちのような人種は、苦しくて、惨めで、消えてなくなってしまうほどの憂鬱。しかし、望みだけは天にもものぼる高さを誇っている。だからタチが悪い。

なにもできない。なにももっていない。なのに望みだけはエライ高い。それがわれわれボンクラである。あーあーつだら。もうなにもかもいやだ。

ロックンロールはそんな底辺をはっている人間に優しい。

↓

ロックンロールはそんな底辺をはっている人間に優しい。ロックというのは人とシェアするためにあるのではなく、人とシェアできない人間のためにある。そこ、おなじように一見感じるがよく考えてみるとまったくちがう。

仲間がいる人間のためにあるのではなく、孤独な人間のためにあるのだ。

最近のロックシーンは人とシェアしようシェアしようというものばかりあるように感じる。シェアなんてしたくないんですよ。ただ、「これはわたしの歌だ！」と思わせてくれさえすれば、あとは勝手にそれが拡散していく。その根底を無視して「みんなで踊りましょう」なんてシェアの仕方にはウンザリなのである。

↓

シェアできる時代だからといっても無理してシェアしなくてもいいと思うのだ。

ちかごろは、その「シェア」も商業性がだんだん見えてきてしまっているのも問題である。フェスの乱立。人々が楽しむ姿。もういやだ。

それらなお前もそこにコミットしなよ、という声が聞こえてくるが、それができないからロックに心奪われたのだ。そんなかんたんにコミットできるほどの友人や仲間がいればこんなにぐるぐる考えを巡らせてはいない。



太宰治の葉桜と魔笛ふうに記すならこうだ。

“あなたの幸福が大きくなればなるほど、そうしてわたしの愛情が深くなればなるほど、わたしはあなたに近づきにくくなるのです。おわかりでしょうか。わたしは、それをわたし自身の正義の責任感からとかいしていました。でも、それはわたしのまちがいです。わたしは、あなたにたいして完璧の人間になろうと、我欲を張っていただけのことだったのです。わたしたち、さびしく無力なのだから、ほかになんにもできないのだから、せめてことばだけでも、誠実こめておおくりするのが、誠の謙譲の生き方であるとわたしは信じています。”

↓

志だけが高く、自分の実存があまりに低いので  
わたしたちはいつも苦しい。

神聖かまってちゃんの楽曲はそんなわたしたちに優しい。



彼らがロックシーンで価値の転覆を成功させたのなら、わたしは息がしやすくなる。スピルバーグが『グーニーズ』の劇中で、ぜんそくのマイキーが吸引器を使うところをわざわざカットせず見せるように、神聖かまってちゃんも自身の弱さや情けなさ、格好悪さを隠さない。あくまで彼らは自分たちの持っているカードで戦う。だからこそ戦う価値がある。



だから神聖かまってちゃんにわたしたちは賭けることができる。ロックシーンやマスに戦いを挑む彼ら。興味のない者からしたら小さな戦いかもしれない。というか、戦いなんてあるの？ぜんぜん見えないんだけど？ という感じだろう。

しかし、わたしたちには生きるか死ぬか自分の全存在がかかっている戦いだ。これで負ければせかいは闇に覆われたままだ。



↓

しかし、わたしたちには生きるか死ぬか自分の全存在がかかっている戦いだ。これで負ければせいかいは闇に覆われたままだ。

彼らには賭ける価値がある。穴だらけの船でけっこう！ やるか逃げるか どうする。

神聖かまってちゃんの船になら飛び乗れる。←



うおお

神聖かまってちゃんとスピルバーグ ー ー ー グーニーズ（まぬけな奴ら）の負  
けられない戦い

<http://p.booklog.jp/book/101506>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ